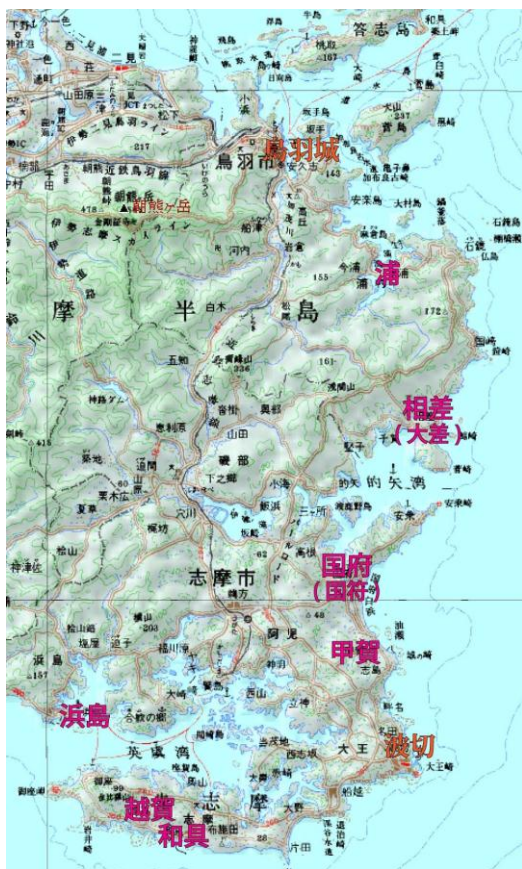


## 海から山へー家臣の選択ー

寛永10(1633)年、鳥羽城主九鬼<sup>ひさたか</sup>久隆<sup>もりたか</sup>は、父守隆の跡目をめぐり<sup>おじ</sup>叔父(実は異母兄)<sup>たかすえ</sup>隆季との争いをきっかけに摂津三田に移ることになりました。そして鳥羽の九鬼氏家中は、三田に移る守隆と丹波綾部に領地を得た隆季のどちらを主君に選ぶのか選択を迫られました。

その結果を示す資料が、守隆時代・久隆時代両方の家臣名簿である(市史第4巻37号資料)。この資料には守隆時代135人、久隆時代70人の家臣の氏名が記されています。その差は65人で、三田への移動で家中はほぼ半減しています。また三田の家中は必ずしも鳥羽からの家臣ばかりではなく、久隆時代に新たに加わったと思われる人物もみられます。なお三田藩の規模は3万6千石、綾部藩は2万石ですので、比率からすれば三田には85人以上が移るべきですが、実際には新たな家臣を加えても鳥羽時代の約二割減となっています。殿様の家の分立・移転と、家臣達による主君の選択をめぐる複雑な事情がうかがえそうです。



志摩七島党ゆかりの地名

ところで志摩には、九鬼氏に匹敵する由緒をもつ家はいくつかありました。その代表が「志摩七党」と呼ばれる浦<sup>うら</sup>、大差<sup>おさす</sup>、国符<sup>こう</sup>、甲賀<sup>こうか</sup>、和具<sup>わぐ</sup>、越賀<sup>こしか</sup>、浜嶋<sup>はまじま</sup>の七家です。江戸時代の資料に「七島党」と記されるこれらの家は、いずれも志摩半島に現存する地名を名字に名乗っています。すなわちこれらの家は、九鬼氏が熊野方面から進出する以前から志摩半島各地に割拠していた土豪でした。これらは必ずしも海に浮かぶ島に位置する地名ではありませんが、それでも七島党と呼ばれてきたのは、彼らが海に生きてきたことの証<sup>あかし</sup>でしょう。

志摩半島の波切(現志摩市)に最初の拠点をおいた九鬼氏は、北上する過程でこれら七島党らを次第に家中に編成し、一部は滅ぼしました。九鬼氏の家臣となった家は織田・豊臣政権下の九鬼水軍の主力として大活躍します。七島党ゆかりの家臣で三田まで移って来たのは甲賀・和具・越賀の三家ですが、中には綾部と分立した家もあります。「海から山へ」は、海に生きてきた家中の大きな転機でもありました。